

円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_p)$ のベクトル空間としての性質について

児玉 英一郎

1. はじめに

自然数 m に対して, $x^m - 1 = 0$ の根を1の m 乗根という. 1の m 乗根全体は, 乗法に関して位数 m の巡回群をなす, その生成元を1の原始 m 乗根とよび, 記号 ζ_m で表す. 1の原始 m 乗根は, $\varphi(m)$ 個(φ はオイラー関数)あり, $e^{\frac{2\pi i}{m}k} = e(2\pi i k/m), (k, m) = 1$ である.

例えば, $m = 4$ の場合, $x^4 - 1 = 0$ の根は, $1, -1, i, -i$ であり, $\zeta_4 = i$ と書くことができ, $\langle i \rangle = \{i, i^2 = -1, i^3 = -i, i^4 = 1\}$ となる.

また, $m = 7$ の場合, $x^7 - 1 = 0$ の根は, $\zeta_7 = e^{\frac{2\pi i}{7}} = e(2\pi i/7)$ とすると, $\zeta_7^n = e(2\pi i n/7), n = 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6$ である. すなわち, $\zeta_7 = e(2\pi i/7) = \cos \frac{2\pi}{7} + i \sin \frac{2\pi}{7}$ とすると, $\langle \zeta_7 \rangle = \{1, \zeta_7, \zeta_7^2, \zeta_7^3, \zeta_7^4, \zeta_7^5, \zeta_7^6\}$ となる.

1の原始 m 乗根全体を根にもつ $\varphi(m)$ 次の多項式

$$\Phi_m(x) = \prod_k (x - \zeta_m^k), \quad (\bar{k} \in (\mathbb{Z}/m\mathbb{Z})^\times)$$

を円分多項式と呼ぶ.

$\mu(n)$ をメービウス関数

$$\mu(n) = \begin{cases} 1 & n = 1 \\ (-1)^r & n = p_1 p_2 \cdots p_r \\ 0 & p^2 | n \end{cases}$$

とするとき, 円分多項式は次の性質を持つ.

$$\Phi_m(x) = \prod_{d|m} (x^d - 1)^{\mu(m/d)}$$

例えば, $m = 12$ の場合, $d = 1, 2, 3, 4, 6, 12$ となり, $\mu(1) = 1, \mu(2) = -1, \mu(3) = -1, \mu(4) = 0, \mu(6) = 1, \mu(12) = 0$ であるから, $\Phi_{12}(x) = (x^2 - 1)(x^4 - 1)^{-1}(x^6 - 1)^{-1}(x^{12} - 1) = x^4 - x^2 + 1$ となる.

1の m 乗根を集めた集合を P_m とすると, $P_m = \{e(2\pi i k/m) | k = 0, 1, \dots, m-1\}$ と書くことができ, $|P_m| = m$ である.

また, 1の原始 m 乗根を集めた集合を Q_m とすると, $Q_m = \{e(2\pi i k/m) | k = 0, 1, \dots, m-1, (k, m) = 1\}$ と書くことができ, $|Q_m| = \varphi(m)$ である. 一方で, $d|m$

なる d に対して, 1の原始 d 乗根は m 乗すると1となるから1の m 乗根の一つである. 従って, $P_m \supseteq \cup_{d|m} Q_d$ となる.

ここで, $|Q_d| = \varphi(d), \sum_{d|m} \varphi(d) = m$ であること, $d, d'|m$ なる d, d' に対して, $d \neq d' \Rightarrow Q_d \cap Q_{d'} = \emptyset$ であることより, $|\cup_{d|m} Q_d| = \sum_{d|m} |Q_d| = m$ となり, $P_m = \cup_{d|m} Q_d$ であることが分かる. P_m の要素は, $x^m - 1 = 0$ の根であり, Q_d の要素は, $\Phi_d(x) = 0$ の根であるから, $x^m - 1 = \prod_{d|m} \Phi_d(x)$ となる.

この性質を使って円分多項式を求めると, 表1のようになる.

表1 円分多項式

m	$\Phi_m(x)$
1	$\Phi_1(x) = x - 1$
2	$\Phi_2(x) = x + 1$
3	$\Phi_3(x) = x^2 + x + 1$
4	$\Phi_4(x) = x^2 + 1$
5	$\Phi_5(x) = x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$
6	$\Phi_6(x) = x^2 - x + 1$
7	$\Phi_7(x) = x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$
8	$\Phi_8(x) = x^4 + 1$
9	$\Phi_9(x) = x^6 + x^3 + 1$
10	$\Phi_{10}(x) = x^4 - x^3 + x^2 - x + 1$
11	$\Phi_{11}(x) = x^{10} + x^9 + x^8 + x^7 + x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$
12	$\Phi_{12}(x) = x^4 - x^2 + 1$
13	$\Phi_{13}(x) = x^{12} + x^{11} + x^{10} + x^9 + x^8 + x^7 + x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$
14	$\Phi_{14}(x) = x^6 - x^5 + x^4 - x^3 + x^2 - x + 1$
15	$\Phi_{15}(x) = x^8 - x^7 + x^5 - x^4 + x^3 - x + 1$
16	$\Phi_{16}(x) = x^8 + 1$

2. 円分体

2.1. 円分体の定義と性質

有理数体 \mathbb{Q} に1の原始 m 乗根 ζ_m を添加してできる体 $\mathbb{Q}(\zeta_m)$ を円分 m 分体(円分体)と呼ぶ.

円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_m)$ は \mathbb{Q} 上の $\varphi(m)$ 次のベクトル空間であり, $\mathbb{Q}(\zeta_m)/\mathbb{Q}$ の拡大次数 $[\mathbb{Q}(\zeta_m):\mathbb{Q}]$ は $\varphi(m)$ となる.

また, $\mathbb{Q}(\zeta_m)/\mathbb{Q}$ は, Galois 拡大で, その Galois 群 $\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_m)/\mathbb{Q})$ は, 以下の自己同型写像からなる.

$$\sigma_j: \zeta_m \mapsto \zeta_m^j, \quad (j, m) = 1$$

ここで, $jk \equiv l \pmod{m}$ とすると,

$$\sigma_j \sigma_k = \sigma_l$$

となるから,

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_m)/\mathbb{Q}) \cong (\mathbb{Z}/m\mathbb{Z})^\times$$

である.

$(\mathbb{Z}/m\mathbb{Z})^\times$ は, Abel 群であり, m が素数 p の場合には巡回群となるから, 円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_m)$ は Abel 拡大であり, 特に, 素数 p に対しては, 巡回拡大となる.

一方, Kronecker によって, \mathbb{Q} 上の Abel 拡大は, 必ず, ある円分体の部分体になることが知られている. 例えば, 2 次体 $\mathbb{Q}(\sqrt{\pm m})$ は, 円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_{4m}) = \mathbb{Q}(\sqrt{-1}, \zeta_m)$ に含まれる. 場合を分けて詳しく見ると, 次のことが知られている.

$$\bullet \mathbb{Q}(\sqrt{2}) \subset \mathbb{Q}(\zeta_8), \mathbb{Q}(\sqrt{-2}) \subset \mathbb{Q}(\zeta_8)$$

$$\bullet \text{素数 } p \text{ に対して, } p \equiv 1 \pmod{4} \text{ の場合,}$$

$$\mathbb{Q}(\sqrt{p}) \subset \mathbb{Q}(\zeta_p), \mathbb{Q}(\sqrt{-p}) \subset \mathbb{Q}(\zeta_{4p})$$

$$\bullet \text{素数 } p \text{ に対して, } p \equiv 3 \pmod{4} \text{ の場合,}$$

$$\mathbb{Q}(\sqrt{-p}) \subset \mathbb{Q}(\zeta_p), \mathbb{Q}(\sqrt{p}) \subset \mathbb{Q}(\zeta_{4p})$$

2.2. 円分体の例

$m = 3, 4$ の場合で見てみると, $m = 3$ のとき,

$$\Phi_3(x) = x^2 + x + 1 \text{ であり, } \zeta_3 = e(2\pi i/3) \text{ とする}$$

$$\text{と, } \zeta_3 = e(2\pi i/3) = \cos \frac{2\pi}{3} + i \sin \frac{2\pi}{3} = \frac{-1 + \sqrt{3}i}{2} \text{ である}$$

ため, $\mathbb{Q}(\zeta_3) = \mathbb{Q}(\sqrt{-3})$ となり, 虚 2 次体となる.

$m = 4$ のとき, $\Phi_4(x) = x^2 + 1$ であり, $\zeta_4 = \sqrt{-1}$ とすると, $\mathbb{Q}(\zeta_4) = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ となり, ガウス数体となる.

$m = 5$ の場合には, $\Phi_5(x) = x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$ であり, $\zeta_5 = e(2\pi i/5) = \cos \frac{2\pi}{5} + i \sin \frac{2\pi}{5}$ とすると, $\mathbb{Q}(\zeta_5)$ は, \mathbb{Q} 上の 4 次体となる.

剰余群 $(\mathbb{Z}/5\mathbb{Z})^\times = \{\bar{1}, \bar{2}, \bar{3}, \bar{4}\}$ は, 位数 2 の部分群

$\{\bar{1}, \bar{4}\}$ を持つから, Galois 理論によって, ガロア拡大 $\mathbb{Q}(\zeta_5)/\mathbb{Q}$ は, 部分体として \mathbb{Q} 上の 2 次体を含む. この 2 次体は, $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ である.

一方で, $\mathbb{Q}(\sqrt{-5})$ は, $\mathbb{Q}(\zeta_{20})$ の部分体となる. 剰余群 $(\mathbb{Z}/20\mathbb{Z})^\times$ について考えると,

$$\varphi(20) = \varphi(4) \cdot \varphi(5) = (2^2 - 2) \cdot (5 - 1) = 8$$

であり, $(\mathbb{Z}/20\mathbb{Z})^\times = \{\bar{1}, \bar{3}, \bar{7}, \bar{9}, \bar{11}, \bar{13}, \bar{17}, \bar{19}\}$ となる.

$(\mathbb{Z}/20\mathbb{Z})^\times$ は, 自明でない部分群として, 位数 4 と 位数 2 の部分群を持つ. この部分群を以下に示す.

・位数 4 の部分群:

$$\langle \bar{3} \rangle = \{\bar{1}, \bar{3}, \bar{7}, \bar{9}\}, V = \{\bar{1}, \bar{9}, \bar{11}, \bar{19}\},$$

$$\langle \bar{13} \rangle = \{\bar{1}, \bar{9}, \bar{13}, \bar{17}\}$$

・位数 2 の部分群:

$$\langle \bar{9} \rangle = \{\bar{1}, \bar{9}\}, \langle \bar{11} \rangle = \{\bar{1}, \bar{11}\}, \langle \bar{19} \rangle = \{\bar{1}, \bar{19}\}$$

ここで, V は, クラインの 4 元群である.

このことから, $\mathbb{Q}(\zeta_{20})$ は, 3 つの \mathbb{Q} 上の 2 次体と, 3 つの \mathbb{Q} 上の 4 次体を含むことが分かる. それらを以下に示す.

・ $\mathbb{Q}(\zeta_{20})$ に部分体として含まれる 2 次体:

$$\mathbb{Q}(\sqrt{-5}), \mathbb{Q}(\sqrt{5}), \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$$

・ $\mathbb{Q}(\zeta_{20})$ に部分体として含まれる 4 次体:

$$\mathbb{Q}(\sqrt{-1}, \sqrt{5}), \mathbb{Q}(\zeta_5), \mathbb{Q}\left(\sqrt{\frac{5 + \sqrt{5}}{2}}\right)$$

$m = 7$ の場合には, $\Phi_7(x) = x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$ であり, $\zeta_7 = e(2\pi i/7) = \cos \frac{2\pi}{7} + i \sin \frac{2\pi}{7}$ とすると, $\mathbb{Q}(\zeta_7)$ は, \mathbb{Q} 上の 6 次体となる.

剰余群 $(\mathbb{Z}/7\mathbb{Z})^\times = \{\bar{1}, \bar{2}, \bar{3}, \bar{4}, \bar{5}, \bar{6}\}$ は, 位数 2 の部分群 $\{\bar{1}, \bar{6}\}$ と, 位数 3 の部分群 $\{\bar{1}, \bar{2}, \bar{4}\}$ を持つから, Galois 理論によって, ガロア拡大 $\mathbb{Q}(\zeta_7)/\mathbb{Q}$ は, 部分体として, \mathbb{Q} 上の 3 次体と 2 次体を含む. この 2 次体は $\mathbb{Q}(\sqrt{-7})$ であり, 3 次体は $\mathbb{Q}(\zeta_7 + \zeta_7^{-1}) = \mathbb{Q}(2 \cos \frac{2\pi}{7})$ となる.

3. Gauss sum

3.1. Legendre の平方剰余記号

$x^2 \equiv a \pmod{m}$, $(a, m) = 1$ が x について整数解をもつとき, a を m を法とする平方剰余といい, そうでないとき, a を m を法とする非平方剰余という. 素数 p と整数 a , $(a, p) = 1$ に対して, a が p を法とする平方剰余であるとき,

$$\left(\frac{a}{p}\right) = 1$$

a が p を法とする平方剰余であるとき,

$$\left(\frac{a}{p}\right) = -1$$

と表し, これを, Legendre の平方剰余記号と呼ぶ.

以下, Legendre の平方剰余記号の性質を示す.

• $a \equiv b \pmod{p}$, $(a, p) = 1$, $(b, p) = 1$ ならば,

$$\left(\frac{a}{p}\right) = \left(\frac{b}{p}\right)$$

• $(a, p) = 1$ のとき, $\left(\frac{a}{p}\right) \equiv a^{\frac{p-1}{2}} \pmod{p}$,

$$\left(\frac{ab}{p}\right) = \left(\frac{a}{p}\right) \left(\frac{b}{p}\right)$$

$$\left(\frac{q}{p}\right) \left(\frac{p}{q}\right) = (-1)^{\frac{p-1}{2} \cdot \frac{q-1}{2}}$$

$$\left(\frac{-1}{p}\right) = (-1)^{\frac{p-1}{2}}$$

$$\left(\frac{2}{p}\right) = (-1)^{\frac{p^2-1}{8}}$$

この性質によって $\left(\frac{5}{7}\right)$ や $\left(\frac{13}{19}\right)$ を求めてみる.

$$\left(\frac{5}{7}\right) \left(\frac{7}{5}\right) = (-1)^{\frac{5-1}{2} \cdot \frac{7-1}{2}} = 1, \text{ 従って, } \left(\frac{5}{7}\right) = \left(\frac{7}{5}\right) =$$

$$\left(\frac{2}{5}\right) = (-1)^{\frac{25-1}{8}} = -1 \text{ となる.}$$

$$\text{同じく, } \left(\frac{13}{19}\right) \left(\frac{19}{13}\right) = (-1)^{\frac{13-1}{2} \cdot \frac{19-1}{2}} = 1, \text{ 従って,}$$

$$\left(\frac{13}{19}\right) = \left(\frac{19}{13}\right) = \left(\frac{6}{13}\right) = \left(\frac{2}{13}\right) \left(\frac{3}{13}\right) = (-1)^{\frac{169-1}{8}} \left(\frac{3}{13}\right) =$$

$$-\left(\frac{3}{13}\right) \text{ となる. } \left(\frac{3}{13}\right) \left(\frac{13}{3}\right) = (-1)^{\frac{3-1}{2} \cdot \frac{13-1}{2}} = 1 \text{ より,}$$

$$\left(\frac{3}{13}\right) = \left(\frac{13}{3}\right) = \left(\frac{1}{3}\right) = 1. \text{ 従って, } \left(\frac{13}{19}\right) = -1 \text{ となる.}$$

3.2. Gauss sum の定義と例

Legendre の平方剰余記号を用い記述された

$$G(\zeta_p) = \zeta_p + \left(\frac{2}{p}\right) \zeta_p^2 + \cdots + \left(\frac{p-1}{p}\right) \zeta_p^{p-1}$$

を Gauss sum と呼ぶ. $p = 3, 5, 7, 11, 13$ の場合の Gauss sum を表 2 に示す.

表 2 Gauss sum

p	Gauss sum
3	$G(\zeta_3) = \zeta_3 - \zeta_3^2 = \sqrt{-3}$
5	$G(\zeta_5) = \zeta_5 - \zeta_5^2 - \zeta_5^3 + \zeta_5^4 = \sqrt{5}$
7	$G(\zeta_7) = \zeta_7 + \zeta_7^2 - \zeta_7^3 + \zeta_7^4 - \zeta_7^5 - \zeta_7^6 = \sqrt{-7}$
11	$G(\zeta_{11}) = \zeta_{11} - \zeta_{11}^2 + \zeta_{11}^3 + \zeta_{11}^4 + \zeta_{11}^5 - \zeta_{11}^6 - \zeta_{11}^7 - \zeta_{11}^8 + \zeta_{11}^9 - \zeta_{11}^{10} = \sqrt{-11}$
13	$G(\zeta_{13}) = \zeta_{13} - \zeta_{13}^2 + \zeta_{13}^3 + \zeta_{13}^4 - \zeta_{13}^5 - \zeta_{13}^6 - \zeta_{13}^7 - \zeta_{13}^8 + \zeta_{13}^9 + \zeta_{13}^{10} - \zeta_{13}^{11} + \zeta_{13}^{12} = \sqrt{13}$

この Gauss sum に関しては, 次の性質が知られている.

$$\bullet G(\zeta_p) = \sum_{x=0}^{p-1} \zeta_p^{x^2}$$

$$\bullet G(\zeta_p)^2 = \left(\frac{-1}{p}\right) p$$

$$\bullet G(\zeta_p) = (\zeta_p - \zeta_p^{-1})(\zeta_p^3 - \zeta_p^{-3}) \cdots (\zeta_p^{p-2} - \zeta_p^{-(p-2)})$$

$$\bullet G(\zeta_p) = \begin{cases} \sqrt{p} & p \equiv 1 \pmod{4} \\ \sqrt{-p} & p \equiv 3 \pmod{4} \end{cases}$$

この第 1 の性質からも, 以下のことが分かる.

$$\begin{aligned} G(\zeta_7) &= \zeta_7^0 + \zeta_7^1 + \zeta_7^4 + \zeta_7^9 + \zeta_7^{16} + \zeta_7^{25} + \zeta_7^{36} \\ &= 1 + \zeta_7 + \zeta_7^4 + \zeta_7^2 + \zeta_7^2 + \zeta_7^4 + \zeta_7 \\ &= 1 + 2\zeta_7 + 2\zeta_7^2 + 2\zeta_7^4 \\ &= (-\zeta_7 - \zeta_7^2 - \zeta_7^3 - \zeta_7^4 - \zeta_7^5 - \zeta_7^6) + 2\zeta_7 + 2\zeta_7^2 + 2\zeta_7^4 \\ &= \zeta_7 + \zeta_7^2 - \zeta_7^3 + \zeta_7^4 - \zeta_7^5 - \zeta_7^6 \end{aligned}$$

また, 第 3 の性質によって,

$$G(\zeta_3) = \zeta_3 - \zeta_3^{-1},$$

$$G(\zeta_5) = (\zeta_5 - \zeta_5^{-1})(\zeta_5^3 - \zeta_5^{-3}),$$

$$G(\zeta_7) = (\zeta_7 - \zeta_7^{-1})(\zeta_7^3 - \zeta_7^{-3})(\zeta_7^5 - \zeta_7^{-5})$$

と記述できることも分かる.

そして, 第 4 の性質から,

$$G(\zeta_3) = \sqrt{-3}, \quad G(\zeta_5) = \sqrt{5}, \quad G(\zeta_7) = \sqrt{-7},$$

$$G(\zeta_{11}) = \sqrt{-11}, \quad G(\zeta_{13}) = \sqrt{13}$$

であることが分かる.

4. ベクトル空間としての $\mathbb{Q}(\zeta_p)$

円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_p)$ は、 \mathbb{Q} 上の $\varphi(p)$ 次元のベクトル空間であり、部分空間として、 $p \equiv 1 \pmod{4}$ の場合には、 $\mathbb{Q}(\sqrt{p})$ を含み、 $p \equiv 3 \pmod{4}$ の場合には、 $\mathbb{Q}(\sqrt{-p})$ を含んでいる。

例えば、 $p = 5$ の場合、 $\mathbb{Q}(\zeta_5)$ は、 \mathbb{Q} 上の4次元のベクトル空間であり、その1組の基底は、 $1, \zeta_5, \zeta_5^2, \zeta_5^3$ である。そして、部分空間として、 $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ を含んでいる。 \mathbb{Q} 上の2次元ベクトル空間 $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ の1組の基底は、 $1, \sqrt{5}$ である。 $\mathbb{Q}(\zeta_5)$ は、 $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ 上から見ると2次元のベクトル空間となっており、その1組の基底は、例えば、 $1, \zeta_5$ と取ることができる。実際、任意の $a + b\sqrt{5}, c + d\sqrt{5} \in \mathbb{Q}(\sqrt{5})$ に対して、 $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ 上の線形結合 $(a + b\sqrt{5}) \cdot 1 + (c + d\sqrt{5}) \cdot \zeta_5$ を考え、

$$(a + b\sqrt{5}) \cdot 1 + (c + d\sqrt{5}) \cdot \zeta_5 = 0$$

とすると、Gauss sum によって、

$$\sqrt{5} = \zeta_5 - \zeta_5^2 - \zeta_5^3 + \zeta_5^4$$

であり、

$$1 + \zeta_5 + \zeta_5^2 + \zeta_5^3 + \zeta_5^4 = 0$$

より、

$$\zeta_5^4 = -1 - \zeta_5 - \zeta_5^2 - \zeta_5^3$$

であるから、

$$\sqrt{5} = -1 - 2\zeta_5^2 - 2\zeta_5^3$$

となる。従って、

$$(a + b(-1 - 2\zeta_5^2 - 2\zeta_5^3)) \cdot 1 + (c + d(-1 - 2\zeta_5^2 - 2\zeta_5^3)) \cdot \zeta_5 = 0$$

となる。整理すると、

$$a - b - 2b\zeta_5^2 - 2b\zeta_5^3 + (c - d - 2d\zeta_5^2 - 2d\zeta_5^3) \cdot \zeta_5 = 0,$$

$$a - b - 2b\zeta_5^2 - 2b\zeta_5^3 + (c - d)\zeta_5 - 2d\zeta_5^3 - 2d\zeta_5^4 = 0,$$

$$(a - b) + (c - d)\zeta_5 - 2b\zeta_5^2 + (-2b - 2d)\zeta_5^3 - 2d(-1 - \zeta_5 - \zeta_5^2 - \zeta_5^3) = 0,$$

$$(a - b + 2d) + (c + d)\zeta_5 + (-2b + 2d)\zeta_5^2 - 2b\zeta_5^3 = 0$$

となる。 $1, \zeta_5, \zeta_5^2, \zeta_5^3$ は、 \mathbb{Q} 上線形独立であるため、 $a = b = c = d = 0$ となり、 $a + b\sqrt{5} = c + d\sqrt{5} = 0$ となる。従って、 $1, \zeta_5$ は、 $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ 上線形独立であり、ベクトル空間 $\mathbb{Q}(\zeta_5)/\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ の1組の基底となることが分かる。

実際、 $\sqrt{5} = -1 - 2\zeta_5^2 - 2\zeta_5^3$ より、 $\sqrt{5}\zeta_5 = -\zeta_5 - 2\zeta_5^3 - 2\zeta_5^4$ となり、 $\sqrt{5}\zeta_5 = -\zeta_5 - 2\zeta_5^3 - 2(-1 - \zeta_5 - \zeta_5^2 - \zeta_5^3)$ となる。従って、 $\sqrt{5}\zeta_5 = -\zeta_5 - 2\zeta_5^3 + 2 + 2\zeta_5 + 2\zeta_5^2 + 2\zeta_5^3$ 、 $\sqrt{5}\zeta_5 = 2 + \zeta_5 + 2\zeta_5^2$ となる。

このことから、

$$\zeta_5^2 = -1 + \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} \zeta_5$$

となる。同様に、

$$\begin{aligned} \zeta_5^3 &= \zeta_5^2 \cdot \zeta_5 = \left(-1 + \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} \zeta_5\right) \cdot \zeta_5 \\ &= -\zeta_5 + \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} \zeta_5^2 \\ &= -\zeta_5 + \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} \left(-1 + \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} \zeta_5\right) \\ &= -\zeta_5 - \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} + \left(\frac{-1 + \sqrt{5}}{2}\right)^2 \zeta_5 \\ &= -\zeta_5 - \frac{(-1 + \sqrt{5})}{2} + \frac{6 - 2\sqrt{5}}{4} \zeta_5 \\ &= \frac{1 - \sqrt{5}}{2} + \frac{1 - \sqrt{5}}{2} \zeta_5 \end{aligned}$$

となり、 ζ_5^3 も $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ 上 $1, \zeta_5$ で表現できる。このことから、 $\mathbb{Q}(\zeta_5)$ の任意の要素 $(a + b\zeta_5 + c\zeta_5^2 + d\zeta_5^3)$ 、 $a, b, c, d \in \mathbb{Q}$ が $\mathbb{Q}(\sqrt{5})$ 上では、 $1, \zeta_5$ の線形結合として表現できることが分かる。

$p = 7$ の場合、 $\mathbb{Q}(\zeta_7)$ は、 \mathbb{Q} 上の6次元のベクトル空間であり、その1組の基底は、 $1, \zeta_7, \zeta_7^2, \zeta_7^3, \zeta_7^4, \zeta_7^5$ である。そして、部分空間として、 $\mathbb{Q}(\sqrt{-7})$ を含んでいる。 \mathbb{Q} 上の2次元ベクトル空間 $\mathbb{Q}(\sqrt{-7})$ の1組の基底は、 $1, \sqrt{-7}$ である。 $\mathbb{Q}(\zeta_7)$ は、 $\mathbb{Q}(\sqrt{-7})$ 上から見ると3次元のベクトル空間となっている。また、部分空間として、 $\mathbb{Q}(\zeta_7 + \zeta_7^{-1}) = \mathbb{Q}\left(2 \cos \frac{2\pi}{7}\right)$ を含んでいる。 $\mathbb{Q}(\zeta_7 + \zeta_7^{-1})$ は、 \mathbb{Q} 上の3次元ベクトル空間である。 $\mathbb{Q}(\zeta_7)$ は、 $\mathbb{Q}(\zeta_7 + \zeta_7^{-1})$ 上から見ると2次元のベクトル空間となっている。

5. おわりに

本稿では、円分多項式、円分体、Gauss sum の性質について述べ、円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_p)$ のベクトル空間としての特徴について論じた。

参考文献

- [1] Lawrence C. Washington: Introduction to Cyclotomic Fields, Springer-Verlag (1982).